

互いに仕え合うための自由 ガラテヤ人への手紙 5章1～15節

確かに、パウロの競技を使った信仰の歩みと戦いの喩えが新約聖書の中にいくつか書いてある。2015年のあるマラソンレースについてのニュースのタイトルは、「マラソン262人コース誘導ミス…ただ1人、正規コース走破「最後尾」9歳男児が優勝へ」だ。それは、岡山県笠岡市のあるマラソン大会の小学生3～6年の3キロレースだ。「沿道の誘導表示はあったが「分かりにくく」、ボランティアのスタッフは沿道にいたものの、ランナーの安全確保をメインに活動していたため、小学生たちが違うコースに入っていくのが分からなかった」。完走した男子は最後から2番目の子の姿すら見えなくなるほどに遅れてしまったから、見守るために自転車に乗った係員がゴールまで導いた。よく走っていても、違うコースに入ってしまったら、最後まで走っていても、無駄になる。誘導表示が「分かりにくい」とか、ボランティアのスタッフのミスなども違うコースに入ってしまった理由になるかもしれないが、元々はランナーの責任なのではないでしょうか。正しいコースに戻りましょうとパウロが叫んでも、戻らないならば、その責任はランナーであるガラテヤ人にある。

一)ゴールまで正しいコースを走りましょう。1章6節「ほかの福音といっても、もう一つ別に福音があるわけではありません。」パウロがはっきり語ったのは、二つのコースがあるわけではなく、ほかのコースは、間違ったコースだ。間違った教えのせいで、ガラテヤ人は律法主義の道に入り込んだ。パウロは2章と3章を使って、「信仰によって義と認められる」ということを説明して、ガラテヤ人の律法主義の問題に言及している。3章と4章の中で、こどもと大人とか、奴隷と主人とか、女奴隷の子どもと自由の女の子どもなど、という三つの喩えを使って、律法主義と信仰によって義と認められることの違いを示す。5章はここまでのまとめだ。5:1、キリストは私たちが解放するために来られ、キリストは、罪や律法や規則から、私たちが解放するために死なれた。しかし、それは私たちが何でも好き勝手にしていい、という意味の解放ではない。もし、それが自己中心の利己的な欲望であれば、欲望や罪の奴隷になってしまう。それに、救いや成長のための規則や方法、特別な条件を提示して、私たちが奴隷にしようとする人々に、対抗しなければならない。

割礼は律法主義の代表的な行為ですから、パウロは割礼を受けることだけを指しているわけではない。5:4、「律法によって義と認められようとしているなら、あなたがたはキリストから離れ、恵みから落ちてしまったのです。」パウロが強いことばを使っている。「何の益ももたらさない」とか、「恵みから落ちてしまった」など、を読むと、酷すぎるのではないかと感じるかもしれない。でも、もし誰かがここは正規ルートではないから、はやくもどりなさいと言ってくれれば、ありがたかった。

5:2-4、律法を守ることによって救われようとするのと、恵みによってすぐわれることは、二つの全く異なる取り組みである。「キリストはあなたがたに、何の益もない」とは、もし私たちが自分を救おうとしているなら、私たちの救いのためにキリストが備えられたことは役に立たないという意味だ。律法に従っているからといって、救われやすくなっているわけではない。パウロが何回も何回も語ったのは、私たちには、信仰を通して神の恵み深い賜物を受け入れることしかできないのだ。さらに、パウロが伝えたいもう一つのことは、神への奉仕も、神の愛を得ようとして行うべきではない、私たちは信仰によって救われたのであり、行いによってではないはずだ。キリスト・イエスにあって大事なことは『割礼を受けるか受けないかではない』(5:6) 律法は救いのためには、もはや何の役にも立たない。しかし、「律法を守ることが無意味になってしまうとするなら、クリスチャンの生活は無軌道、無規律であってよいのか」。

パウロは、愛によって働く信仰こそ大切だと答えている。「愛によって働く」は、「愛を通して働く」、つまり「愛から生じるのではなく、愛の働きという形で現れる」の意味だ。「信仰」こそ「愛」の源であり、そして「愛」は「信仰」の証しなのだ。ルカの福音書 7:40～47を見ましょう。多く赦される人は多く愛する。ですから、信仰は愛によって表わされる。自分が人を愛しているかどうかを見ることによって、信仰の状態を知ることが出来る。信仰による神様の恵みが私たちが救うのであって、愛や寛容な行為によって救われるのではない。

二) 誤った教えや罪の影響が蔓延しないように。群れの良いところは互いに支え合えることだ。けれども、群れの中は互いに影響しやすく、それが、すべてよいものとも限らない。先ほど話した子どもマラソン

のことがそれを示している。「あなたがたはよく走っていた」という言葉から分かったのは、最初彼らは正しい道を順調に走っていたようだということだ。パウロが違うコースに入ってしまったのでそれを正したい。しかし、ガラテヤ人はパウロ敵意を持ったようだ。「私はあなたがたに真理を語ったために、あなたがたの敵になったのでしょうか。」「道を正す」つまり悪くなってしまうものを正しい状態に戻すことを、「矯正する」とも言いますね。テモテへの手紙 第二 3:16~17「聖書はすべて神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練のために有益です。神の人がすべての良い働きにふさわしく、十分に整えられた者となるためです。」

ガラテヤ人はパウロが彼らの信仰の間違いを矯正したいと思ってしたことを、彼らに強制を与えると理解したようだ。日本語はおもしろいです。正す意味の矯正か、強いる意味の強制か、字を見ないと、勘違いしてしまうこともあるのではないかな。もちろん、矯正される場合でも、不機嫌になることもあります。強制されると感じるならば、敵意が出てくることが多い。誤った教えは危険だ。それよりもっと危険なのは、矯正の声を聞きたくない気持ちをかたく持っていることだ。矯正される時、聞く耳をもつことができるように、求めましょう。その上で、簡単ではないですが、互いに矯正し合おうという意識を持ちましょう。

パウロはもう一つの喩えを語る。「わずかなパン種が、こねた粉全体をふくらませるのです。」聖書の時代、パンはすでに発酵したパン生地の小片を新しい粉に練り込んで、粉全体を膨らませてから焼いていました。この小片を、パン種と言い、これには二つの意味が含まれている。1)レビ記では、主への火による捧げ物にはパン種を入れることが禁じられていました。その理由は、発酵は腐敗を意味したからだ。2)新約聖書でパン種という言葉が象徴的に用いられる場合は、罪を指す。ガラテヤ人への手紙 5章で、パウロは「邪魔する者」の誤った教えや説得を「パン種」にたとえて、それがガラテヤの教会全体を次第にむしばむことになる危険性を指摘する。

巣くうという言葉の意味は、巣を作ってすむということですが。害になるものが集まってそこを根城にするとか、悪い考えや病気が宿ることなども指している。「鳥が飛んできて、あなたに頭の上にとまるのはどうしようもない。しかし、頭の上に巣をつくらせてはいけない。」時々なにか悪い考えや間違った教えが、どこからともなくやってきて、頭から離れない事があるものだ。それでは、悪いことを考えたり、間違った教えを聞いたりすることは、つみになるのでしょうか？必ず神様から遠く離れてしまうのでしょうか？問題なのは、その悪い考えではなく、間違った教えがあることでもなく、それを聞いた私たちがどうするのかです。イエス様が荒野で試された時、悪魔は悪い考えをささやき、旧約聖書の御言葉の内容を故意に変え、神様に関することや約束を曲げて説明し、嘘をついて、イエス様を神様に背かせようとした。けれども、イエス様は、悪い考えや間違った教えには、耳をかきしなかった。悪魔の言うことを信じないで、きっぱりと断った。神様の約束である聖書を読み、ひとつひとつの約束をおぼえましょう。

三) 自由とは、勝手気ままに振る舞うことではない。ガラテヤ 5:13、キリストが与えてくださる自由とは、神と人を愛することのできる自由、自発的な愛によって互いに仕えていくことのできる自由なのだ。パウロが語っている自由とは、規律がないことではなく、ほしいままに行動することでもない。クリスチャンの自由は、正しい事をする事が出来るということだ。では、クリスチャンが自由を履き違えてしまうことは有り得るでしょうか、有り得ないでしょうか。答えは、「有り得る」だ。ですから、パウロが自由とは、勝手気ままに振る舞うことではない、とかたく伝えている。特に、パウロが言ったのは、肉体的な情欲についてのことだ。「肉の働く機会」とは肉体的な情欲に関することを意味する。情欲のままに行動することがもたらす結果は、罪にさえなり得る。個人への影響だけにとどまらない。相手や周りの人を傷つけるはずだ。

互いに仕え合うための自由だ。本当の自由は互いに仕え合うための自由だ。愛し合うことを実践する人は、命の美しさを表わしているのです。互いに仕え合うことは、周りの人の益になるし、美しい証になる。ヨハネの手紙第一 4:16~21は愛についての教えだ。「律法全体は、「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい」という一つのことばで全うされるのです。」愛を持って、愛し、愛される毎日を走りましょう。互いに仕え合う、真に愛し合う群れを目指しましょう。